



Title	農業經濟學の發達
Author(s)	高倉, 新一郎
Description	説苑
Citation	北海道帝國大學法經會法經會論叢, 8, 227-237
Issue Date	1940-03
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/10682
Type	departmental bulletin paper
File Information	8_p227-237.pdf



說苑

農業經濟學の發達

高倉新一郎

はしがき

私が以下に述べようとするのは、Dr. Leo Drescher の Agrarökonomik und Agrarsoziologie über die Aufgaben und Grenzen der Agrarwissenschaften ein Vergleich zwischen der Entwicklung in Deutschland und der in den Vereinigten Staaten von Amerika. Jena 1937. (農業經濟學と農業社會學、農學の課題と限界に就て) 獨逸及び北米合衆國に於ける斯學發達史の比較) の前編 Agrarökonomik 中の第一節 Entwicklung der Agrarökonomik in Amerika 及び第二節 Die Entwicklung der deutschen agrarökonomischen Wissenschaften の内容である。題目の示す通り著者は、亞米利加合衆國並に獨逸に於ける斯學の發生及び發達の傾向を比較し、その研究課題を檢討し、結局兩者の見解の一致する二つの科學 (Agrarökonomik, Agrarsoziologie) が成立し得る事を述べやうとして居るのであるが、今私が特に此一章を選んだのは、日頃斯學の發達に關する大觀を得たいと願つて居た時

に偶々それに行當つたからに過ぎない。

尙ほ註はすべて原著の註である。本論の性質上、附加した方が便利だと思つたので、煩をいとわず引用した。

一、亞米利加合衆國に於ける農業經濟學の發達

亞米利加合衆國に於ける農業經濟學の歴史は僅々三十年乃至四十年を經過したに過ぎない。^(註)一九〇〇年以前には經濟學の斯る部門は存在しなかつたのである。此の短日月に急激な發達をしたに拘らず、今日では農業經濟學は一つの大きな完備した大系を備へて居る。即ち農業經濟學 (Agricultural Economics) は歐羅巴とは獨立して發達した亞米利加合衆國独自の産物であつて、唯此の新しい科學の創設者が、その教養と示唆の一部を歐羅巴から得たに過ぎない。是に關する研究機關の數、科學的論文の數では遙に他の國をしのぎ、研究費の如きも他の何れの國よりも潤澤にして斯學の發達を助けて居る。

上の様な事情で著者は先づ亞米利加合衆國の農業經濟學の發達を俎上にのせる。

農業經濟學の最初の研究は純粹に經營經濟的のものであつて、生産費を決定せんとする意圖から出發した。最初から典型的な商業的立場をとつて居た亞米利加の農家は、如何にせば多くの利潤が得られるかと云ふ事が最大の問題だつた。そこで爲政者は既に十九世紀の半頃には玉蜀黍や綿花の様な農産物の生産費計算を企て、居たが、その最初の科學的研究は一九〇〇年に初めて公刊された。即ち Nebraska 農事試験場では此年、作物生産費に關する資料を公刊し、一八九四年及び一八九五年に Wyoming が同様の調査を發表した。然し、其方法に新面を開いたのは St. Paul なる Minnesota 大學に職を奉じて居た W. M. Hays である。彼は從來生産費調査のために用ひて居た方法、即ち小さな試験區の中で行つて居た方法を排して、多數の農場を調査し、その結果を生産費計算の基礎としたのである。彼の論文は世紀の變り目に公にされたのであるが、^(註)一九〇五年彼が Washington

の農務次官 (Assistant Secretary of Agriculture) となるや、聯邦政府も亦この新しい學問に積極的な關心を持ち始めたのである。故に彼は斯學の開拓者の一人なのである。

經營學の概念は既に一九〇一年 W. J. Spillman が政府から依頼されて經營學 (Farm management) の研究に當る以前から知られて居たが、一九一五年に至る迄かゝる新しい經營的部門は農産局 (Bureau of Plant Industry) に屬して居た。世紀が變ると經營經濟學に關する出版が次第に多きを加へて來た。Spillman の専門は從來農業生産技術 (特に牧草及飼料について造詣が深かつた) であつたが、彼がその任に就くや新しい専門領域に關して多くの論文を發表した。一九〇二年には農業年報 (Yearbook of Agriculture) に合衆國に於ける經營方式に關する資料が掲載せられる様になり、その上多數の經營經濟學の記述的論文が公にされる様になつた。かゝる論文の總ては、然し、研究結果を農耕の實地に應用する場合に於ける忠言であつて、その叙述の方法は例示的であつた。即ち合衆國を多くの經濟領域に分ち、その各々に對する典型的なものを描き出したものである。

農務省と各州の専門學校との共同研究は、經營學を非常に進歩させた。Spillman の指導の下に農業經營局 (Bureau of Farm Management) は Pennsylvania 州に於ける Chester County の經營經濟的調査を行ひ、その結果を一九一六年に公刊した。此の新しい調査に依て、經營學の領域は農業技術的問題及び社會的問題と區別されるに至り、以後所得・利潤・投資及び經營方式に限られる事になつたのである。

特に經營經濟的調査を行つた州立大學の内では、紐育州の Ithaca に於ける Cornell 大學の農學部が優れて居た。即ち教授 G. F. Warren が一九〇六年から八年に亘つて一つの經營經濟的調査を行つたのであるが、それが後世の此の種の研究の範となるに至つた。^(註三)この調査の新味は、簿記記入の結果や質問用紙等に依らずして、小範圍に於ける農場を個別に訪問してその基礎としたと云ふ點にある。斯る方法は Survey method として知られるに至つた。Warren は彼の模範調査に於て、經營學とは特別に關係のない種々の要素をも採り入れた。即ち婦

人労働問題、家族の大きさ・年齢・教育等の社會問題をも取扱つたのである。

國民經濟學の見地は、最初の經營經濟學的研究には何の役割をも演じなかつた。然し乍ら後に至つて、別な方面から農業の經濟問題にふれざるを得なかつた。從來商工業問題にのみ關心を持つて居た經濟學は次第にその興味を農業に向け始め、その傾向は特に九〇年代の恐慌の際に顯著となつて來た。一八九二年及び一八九六年に亞米利加經濟學會 (American Economic Association) は始めて、農業問題を其定期學會に於て取扱つた。Harvard 大學の T. N. Carver は此の時代に農業問題に關心を持つた最初の經濟學者の一人であつた。(註四)

その少し前から H. C. Taylor が農業經濟學の組織的建設に着手して居た。一九〇二年—三年の冬期に、彼は農業經濟學の最初の講義を Wisconsin 大學に於て行ひ、間もなく一九〇五年最初の教科書を公にした。(註五) ために亞米利加に於ける農業經濟學の父と仰がれて居る。その仕事が如何に偉大なものであつたかは、彼が農務省に於ける農業經濟局 (Bureau of Agricultural Economics) の組織者になる迄の素晴らしい立身が證明して餘りある。

Wisconsin 大學も亦一九〇八年農業經濟及び農場經營に關する學部を設置し、Minnesota 州の Cornell 大學及び St. Paul 大學に次いで、新しい科學の温床となつたのである。

それ迄は、亞米利加でも獨逸と同じ様に、農業經濟的科學を農政學と農業經營學とに分けて居た。Taylor は、其科學的立場の大部分を其人に負ふて居た R. T. Eedy と同様、常に英吉利並に獨逸に其範を採つて居た。故に獨逸の影響を受けて居る事は事實だが、發展は全く別の方向に向いて行つた。

農業經濟研究者の活動に刺戟されて、亞米利加經濟學會は一九〇七年、農業問題の再認識を始めた。T. N. Carver を議長とした經濟學會大會が、Agricultural Economics を經濟學の獨立部門とした事は、此の新しい科學の歴史上劃期的な事であつた。然し乍ら、農業經營學の支持者たる Warren や Spillman は是に参加せず、別な組織を創設した。即ち一九〇八年 Warren は經營經濟學者を Cornell 大學に叫合し、Spillman と共に斡旋

に努めた結果二年後に亞米利加農業經營學會 (American Farm Management Association) を創立した。

この新しい農業經濟的科學が獨立した事はやがてより大きな發展をする基礎となつた。獨逸の體勢に對抗して農業經濟學たる汎稱の下に新しい重要な部門が生れ出でたために、經營學はその獨立した地位を間もなく失つて了つた。經營學と相並んだ最初の特種部門として農業販賣學—農業市場論—Agricultural Marketing) が發達した。市場と販賣の重要性は既に古くから認められて居り、亞米利加經濟學會も亦一九〇八年農業市場問題を討議した事があつた。最初に販賣學が特別に講義されたのは Wisconsin と Minnesota の兩大學に於てであつたがそれは一九一三年以後の事である。Taylor は此の領域でも亦先驅者であつた。農務省に在つても一九〇九年以後農業年報に市場及び協同販賣に關する章が設けられ又一九一三年には省内に市場事務所 (Office of markets) が開設され種々の變遷を経た後一九一七年には、農業經濟局に重要な地位を占む迄に至つて居る。

元來販賣學と密接な關係を有して居るので、農産物價格の研究が間もなく又一つの獨立部門に發達した。此の方面には、世界大戰以來、農業經濟學者も農務當局と共に特に注意を拂つて居たのである。殊に戦後の農業恐慌後價格の安定及び豫想に關する問題を解決するために、價格決定の基礎及び價格關係を研究せねばならなかつたので、價格の研究は特に重要視されるに至つた。かゝる領域に對しても亞米利加は最近十年間に新しい方法による數多くの勞作を生んで價格の分析に多くの貢獻(貢献)をなした。

農業經濟學の今一つの領域即ち土地經濟論 (Land-Economics) は、未だその歴史が淺い。R. T. Ely はかゝる特別科學を基礎つけた人であつて、今日では殆んどすべての大學にその傳統をつぐものを持つて居る。一九一九年農務局 (Bureau of Agriculture) 内に土地經濟課 (Land Economics) と稱する特別の課が設置された。然し乍ら Land Economics は農業の領域を踏み出して、都會の土地をも取扱つて居るのである。Ely は尙ほ公共事業 (Public Utilities) をも新しい研究領域に採り入れた。

農業經濟學は是等特殊領域の總稱である。是等の領域の形成の内に二十年代には尙ほ獨逸の學問と非常な類似を持つて居た亞米利加の斯學の特殊な發達を見得るのである。この農業經濟學の定義の新しい概念は、又、農科大學や、農務省の新組織に表現されたのである。一九二二年には農務省内の種々の部門の上に農業經濟局(Bureau of Agricultural Economics)が設けられ、總ての特殊部門を統合し、農業行政上、非常に重要な地位を占むるに至つたのである。

農業經濟局の中では、例へば農業經營學會が結成されて居て、農業經濟學の代表者を對立する等種々の特殊團體があつたが、一九一九年すべてが亞米利加農業經濟學會(American Farm Economic Association)に加入する事になつて問題は解決した。^(註七)即ち専門化する一方強い結合の傾向も窺はれるのである。専門化すると共に聯合も亦行はれて行つたと言ふ嬉ぶべき傾向は、大部分亞米利加人の科學的能力に基くものであつた。

農業經濟學は、最初から、農業社會學(Agrarsoziologie)と密接に結びついて居た。農業經濟學に關する教科書には尙ほ多くの章節に農業社會學が説かれて居るが、然し乍ら農業社會學は一つの特種科學で、農業經濟學と峻別されなければならぬものである。同様な關係にあるものに農業地理學と農業史がある。然し是も、地理學及び史學の特殊部門となつて行く傾向がある。

然らば Agricultural Economics とは何であるか。又あらねばならぬか。

農業が尙ほ經濟的活動の支配形態であつた時は農業の經濟的科學は經濟に關する唯一の學問だつた。然し乍ら資本とか所得とか生産費利潤等の概念は工業經濟より生れたものである。工業の勃興が今日の經濟學を成立せしめる動機となつたからである。然し乍ら貨幣資本と工業に基礎を置いた經濟制度は農業部面にあてはまらなかつた。即ち例へば資本の廻轉が遅いために利潤率は本質的に低く、生産の集中は困難で、經營の集中には限界を認めねばならない事が解つたのである。故に農業經濟學の特種的地位は、常に農業の特性である問題の複雑性を解決

すると言ふ點にある。即ち農業經濟學とは經濟學の原理をそのまゝ、或る經濟部門——即ち農業に應用するものではなくして、一般經濟學を農業生産のために變形し、順應せしめんとするものである。此の關係は斯學の本質であつて、亞米利加の農業經濟學の支持者に依て特に強調されて居るのである。農業經濟的科學の出發點と歸結に關する亞米利加的把握の典型的なものとしては Nourse の次の如き言葉がある。「古典的及び新古典的抽象的研究法の前提を總ての上に位する最高指針とする」と言ふ思想が是である。桃の販賣、純血種畜の飼育、若くは排水施工の如き外的な、技術的な問題の背後に、農業經營の最も重要な經濟的問題として、如何にせば生産要素たる土地・勞働・資本を正當な關係に於て最も有効に使用することが出来るかと云ふ問題が潜んで居る。それが農業經濟學の眞の問題であり、それが私用に供せられやうと、團體若くは民族の一般的福祉のために用ひられ様と、そんな事には無關係に、すべてこの解決は、かゝる經濟的平面の上に一致せねばならないのである。農業政策はこゝでは問題外であり、經濟外の考慮に餘地を與へず、經濟的な福祉が満足され、確保された時は、殘餘の問題は總て容易に解決されると信念に基いて居る。此處に獨逸の農政學の概念との根本的な差異があるのである。而してかゝる理解の發達した所以を著者は

一、亞米利加大陸に存在した無盡藏な土地のために國家は國民の經濟生活の調節をそれに任せ、干渉を試みる必要がなかつた事、從つて社會經濟組織は自由なる個人を基として築かれ、その關係は經濟發展の時代にそのために必要だつた個人の關心を基として打立てられた古典派經濟學の生れた環境に類似して居た事。

二、廣大なる打つどいた地積から生ずる社會關係の單純性、殊に市場の一様性と廣大性とは妨げられる事なき企業心と相俟つて驚異に價する經濟組織を、學問とは無關係に出現せしめ、學問は、後から、是等の内から、法則を發見し是を應用する事によつて多くの問題を解決する事が出來た事。

三、アングロサクソンの子孫を主とし又困難な開拓生活をして來た所から亞米利加人は現實的であり、合理主

1) E. G. Nourse : Agricultural Economics. 1916. S. 6ff.

義的である故に哲學的思想を輕視し、純粹科學を目標として自然科學の方法を重んじた事。等に歸して居る。

註一、S. V. Frauendorfer : Entwicklung, Methoden und Ergebnisse der agrar-ökonomischen Forschung in den Vereinigten Staaten. (Berichte über Landwirtschaft, N. F. Bd. 8, 1928)

J. T. Horner : The United State Governmental Activities in the Field of Agricultural Economics prior to 1913. (Journal of Farm Economics vol. X No4. Oct. 1928)

G. F. Warren : The origin and development of Farm Economics in the U. S. (Journal of Farm Economics. 1932. Vol. XIV. No1. Jan)

E. H. Thomson : The origin and development of the office farmmanagement in the U. S. Dep. of Agriculture. (Journal of Farm Economics. 1932. Vol XIV. No1. Jan)

註二、W. M. Hays の最初に公にしたものは耕種に関するものであつた。然し一九〇六年に Cost of producing farm products, Methods of investigation を發表し一九一二年に Farm Management に関する一書を公にした。

註三、Cornell University, Agricultural Experiment Station, Bull. No. 295.

註四、T. N. Carver は一九一一年に農業經濟學の教科書として Principles of Rural Economics を著したが、その中で彼は國民經濟學的、社會學的立場から農業問題を取扱ひ、經濟學的方面には重點を置かなかつた。最近版は一九三二年である。

註五、H. C. Taylor は以後多くの勞作を公にしたが最近のものは Outlines of Agricultural Economics, New york 1931 である。

註六、農業經濟局内では、價格研究に對する特別機關として、調査課(Division of Historical and. Statistical Research)を設けた。

註七、Journal of Farm Economics はその機關誌である。

二、獨逸に於ける農業經濟的科學の發達

獨逸農業經濟學も亦農業經營學に其根源を持つて居る。歴史的に見て最初に、農業經濟的科學の一種として成立

したものは農業經營學であつた。その始めは獨逸中世史に迄遡る事は出来ない。一種の農業簿記をつけ始めたのは僧院である。即ち其寺領に對して僧院は早くから、收支及び計劃を比較的新しい方法で記録して居たのである。同様に封建領主の莊園でも古くから收入及び經營の問題に關する組織的な記帳が必要だつたのである。Ludwig des Frommen 時代に出來た *Capitule de Villis* (莊園法) はそれらの計劃中最も知られたものであつた。

然し乍ら斯る極めて素朴な記帳を直ちに以て一つの科學の始りと看做す事は出来ない。農業經濟學が眞に科學的に基礎づけられたのは、實に古典的國民經濟學が完成した時代に於てである。農業經濟學の鼻祖と仰がれる Albrecht Thaer は其時代及び當時の思潮の眞の代表者であつたに止まる。彼は農業の經濟學 (*Wirtschaftslehre des Landbaues*) を樹立せんとしたが、それには純粹經濟學の成果を應用する事で充分だつた。勿論、農業は一つの製造業であり、金儲けが主たる目的であるとすると彼の考には賛成する事は出来ないにしても、彼が農業經營學を科學的に基礎づけるために努力した最初の人である事は認めねばならぬ。彼の影響は、例へば Adam Müller (註1) や L. von der Marwitz の様な反對者かあつたにかゝらず、前世紀に於ては頗る強かつた。それは彼が獨逸に於て農業が英國の模範に習つて集約化し、合理化さねばならない時代に生きて居たからである。

Albrecht Thaer については十九世紀中から今日迄獨逸の國內は勿論、海外に迄名聲を拍した農業經營學者、即ち例へば Schwert. Von der Goltz. Aeroboe の如きが續出した。就中特に目立つのは農業經濟學の領域に立地學を打ち樹て不朽の功績を残した Johann Heinrich von Thünen である。

國民經濟學的學科としての「農政學」(*Agrarpolitik*) も亦前世紀の初に既に樹立されて居た。最初 Jakob 若 (註2) くは Soeden の如き Kameraristen が後に Lotz や Rau が、農政學を應用經濟學 (*praktische Volkswirtschaft*) の内に樹立せんと努力した。今日著名な農政學に關する教科書はすべて歴史學派の國民經濟學者の著述にかゝるものである。農政學の研究は農業に關する廣汎な歴史的基礎及び過去の農業關係に依て特徴づけられて居る。勞

働及び農民問題の如き農業の社會的方面も亦社會政策に興味を持ち社會改造的思想に熱中した時代には特に注意が注がれた。Roscher, Von der Goltz, Buchenberger 等の教科書及び現在の Max Sering 其他の研究は、その廣さ及び深さに於て獨逸農政學史上特筆すべきものである。(註六)

農業生産の技術的方面以外を取扱ふ農學は、獨逸では今日迄經營學と農政學に分たれて居た。而して農業經營學はその研究範圍に就いて何等疑問を起す餘地がないが、科學としての農政學は、その名稱が表すよりも遂に廣い領域を包括して居るのである。而も此の概念は十九世紀の初より、今日迄變らないのである。Roscher のみは一八九九年その著 National-Ökonomie des Ackerbaues を公にした際、他の名稱即ち Nationalökonomie des Ackerbaues なる語を用ひやうとした。成程 Kameralist 時代には、Kameralist 的な基礎や方法の應用を農業にあてはめる事は必要だらうが、後には農政學は最早此特色に適合しなくなり、經營學的・經濟學的方法が農業經濟學的方法として益々重要になつたのである。だからと言つて農業に對する國家的方策の總和としての農政學は、全く敗北に歸したとは尠くとも獨逸では言へないのである。けれども、十九世紀全般を通じて、今日に於てすらも、尠からず工業化の進展と共に經濟化も強化し、個々の經濟部門に浸透し、最後に農業にも及んで來たものである。そこに科學としての經濟學及び農業經營學存在の意義が求められるのである。經濟學と政策學、特に農業經營學と農政學との間の移行には何等の新計劃を必要とはしない。即ち政策が重要視される事は既に Kameralist 時代にも明かであり、例へば自由貿易論も亦一度は政策の具に供せられた。政策を重要視する事は、勿論政策的手段に對する科學的確認及び推測をも包括することを意味し、決して政策的判斷には何等の指針も準備も必要としないと言ふ意味ではない。政策に對する經濟學の役割は、すべての場合に於て科學的研究の結果が政策的期待と必要に一致すると云ふ前提を設けない時に始めて發揮されるのである。科學の任務は政策的判斷に對して必要な知識及び基礎を提供すると云ふことのみであらねばならぬ。かゝる見解から出發して、現在の經濟的、社會的狀態を

査調研究する科學は既に政策ではなく、従つて農政學に替ふるに農業經濟學の名稱を以てすべきであるのである。

註一、Marwitz に関する多くの文献中最新のものは B. Sommerlad : L. von der Marwitz und das Bauerntum, Odal, April 1937.

W. Kayser : Noch einmal : Ludwig von der marwitz Odal, Mai 1937

註二、Grundsätze der Nationalökonomie 1805

註三、Die Nationalökonomie, 1805.

註四、Handbuch der Staatswissenschaftslehre 1821.

註五、Grundsätze der Volkswirtschaftspolitik. 1844.

註六、Gr. Ruhland も亦國民經濟學史上算へ上ぐべき人である。

あとがき

著者は更に是に續いて、第三章と Die Unterschiede zwischen der deutschen und amerikanischen Auffassung vom Gegenstand und von den Methoden der Agrarökonomik (農業經濟學の對象及び方法に對する米獨兩國の見解の差異)と Der Gegenstand der Forschung及び Die Forschungs methoden に分ち興味深い叙述をすゝめ、更に第四章に Die Forschungsaufgaben der Agrarökonomik (農業經濟學の研究課題)について論じて居て、啓發される所が尠くなかつたが、それ等の紹介は又別の機にゆづる。